

過去・現在・未来へ繋げる食・農・農山村の豊かな暮らし

オンラインシステム、動画配信システム等による
農村地域の魅力情報の発信について



奈良県 下浦隆裕

今、みなさまの関心事は何ですか？

自分の体の健康的なこと？

暮らしの安心なこと？

楽しいことがしたい？

おいしいものを食べたい？

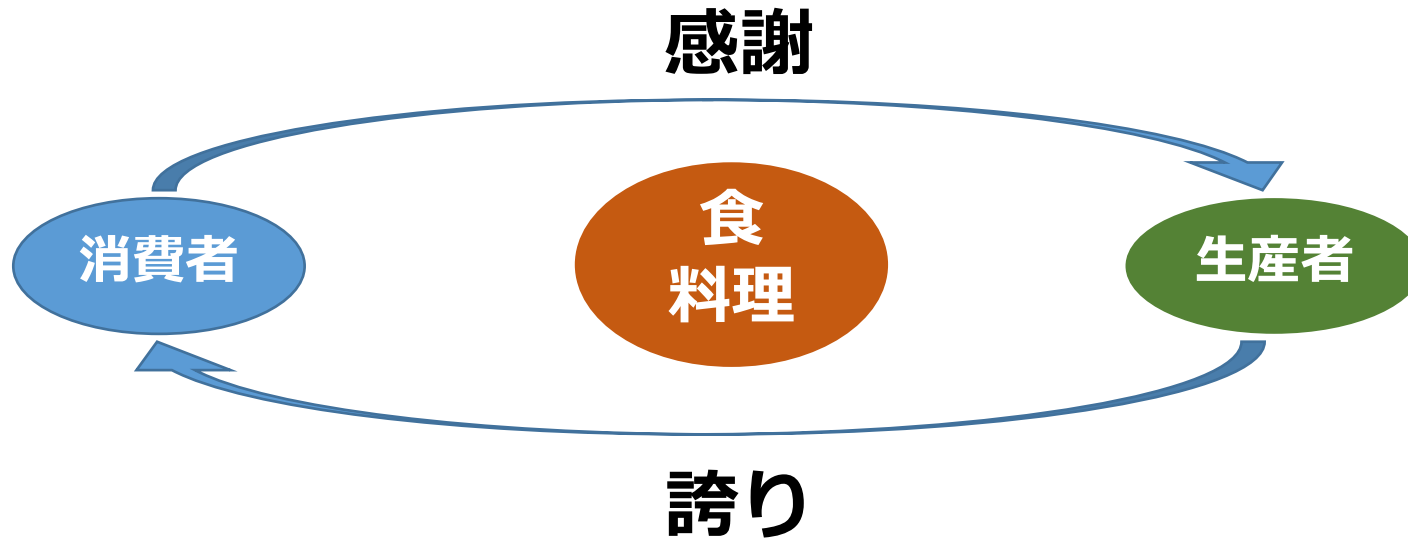
ガッツリ儲けたい？

．．．．．

その中でも、誰もが共通して話ができること

それは．．． 『**食べること**』

食と農のつながり



奈良県豊かな食と農の振興に関する条例

(令和2年4月1日施行)

★基本的な施策

1. 食の提供の充実
2. 食を楽しむ機会の拡大
3. 健康的な食生活の実現
4. 子どもの健全育成

お互いのつながりを大切にする気持ち

農村の未来図 (案)

情報活用による農の10次産業化

「楽」をキーワードに
農業農村を魅力あるものに

1次 農を楽する

農作業の電化・自動化
水管理の遠隔化
田んぼ 水循環・浄化・ダム
ドローン・GPS活用 (管理・消毒)

2次 食を楽しむ

特産品開発・食品加工
オンライン直売・配達サービス
出荷作業・管理 効率化

3次 農村を楽しむ

農業体験・生きものの体験
半農半X・ワーケーション
ヒーリング・健康増進
農村での出会い・つながり・交流

4次 文化を楽しむ

伝統行事祭事のオンライン発信
伝統食の継承
歴史文化のアーカイブ化

10次産業化

農 + 食 + 農村 + 文化
1次 2次 3次 4次



ドローン、GPS活用
農地・森林の管理

カメラ設置で
管理・遠隔操作
地域随所に
エネルギースタンド

再生可能エネルギー
の自給

ソーラーシステム
(水面にパネル)

小水力発電
システム

農業体験
オンライン配信

販売所

機械の電化・
電気の自給

オンライン遠隔操作
栽培・水管理

伝統行事都市住民参加
日程内容等配信

オンライン交流・講座

地元農産物の
おいしい食べ方配信

地元農産物の
オンライン購入

ライブ配信

オンライン
ツアー

地元農産物の
オンライン購入

地元農産物レストラン

農家に学ぶ家庭菜園

未来へつなげたい 夢

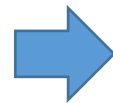
(1) 都市(消費者)と農村(農家)の距離を縮める (情報通信で新たな絆をつくる)

情報通信を皆が使いこなせる普及が重要
農村魅力発信を契機に農村情報ネットワーク化

生産の応援・消費の応援、安心・安全な暮らしの応援、安らぎ・憩いの応援

<普及のイメージ>

地区の公共施設
主要土地改良施設
〔オンライン会議
勉強会〕



モデル的な農地
農村交流など
〔オンライン交流会
オンライン講習会〕



主要な農業団地
農村全体
〔オンライン販売
オンライン体験〕

⇒共通の話題で広め新たなコミュニティを形成
(新しい通信技術で心を繋げる)

オンラインを使って多様なテーマで実践活動 (情報通信技術の普及)

食を切り口に
賑わいある
農村の増加

人をつくる (集める)

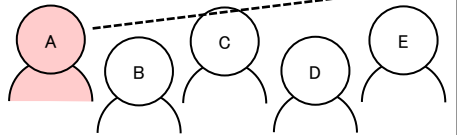
地域をつくる (実践する)

食・農・文化でつなぐ

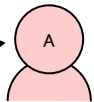
<構成メンバー例>

- ① 活動の中心
→ 地元の人
(農家、商店主、市町村担当者等)
- ② 外からの新たな力
→ 大学の先生・学生、経験者
- ③ 活動の方向を誘導
→ 指導社・指導者

プロジェクトチーム結成
「テーマ」によりオンラインで
人を集める



チームの「指導者・主導者」



チームの実践活動
責任者 (P地区)



「テーマ」によりチームを結成
オンラインでつながる

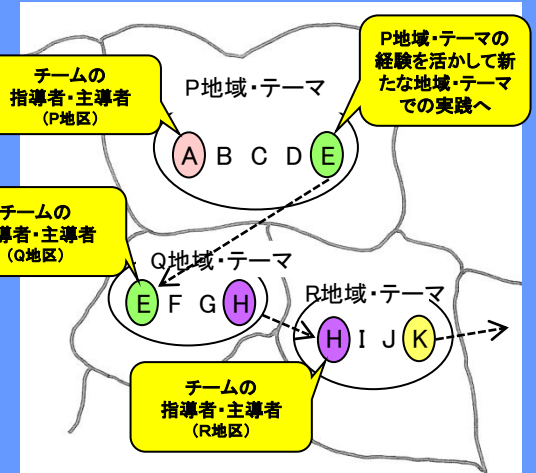
オンラインで
情報発信

健康や防災
を学ぶ

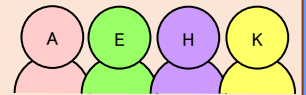
スマート農業の
展示会を開催

食・農・農村
体験を開催

地域の食材を
活用する



地域・テーマの指導者・主導者を対象に、
・情報交換
・勉強会
・フォーラム
等を開催し、
レベルアップやプロデュース能力の向上
を図り、自主的・主体的な活動の気運醸
成を図る。



「テーマ」別にチームで
ワークショップを実施

プロジェクト
事業計画を
作成

実践活動の準備
途中経過を共有・発信

各チームで
情報共有
ホームページ
SNS等で発信

「テーマ」による
実践活動の実施



<行政・大学・企業・協議会>

1. プロジェクト (実践活動) メンバーの募集
2. プロジェクト (実践活動) の確認
3. 実践活動費の助成
4. 情報発信 (活動の広報、後援)
5. 円滑な活動実践のための相談窓口

未来へつなげたい こと

(2) 田んぼ（農地）の機能を生かす （田んぼダムの取り組み）

農業⇒農地 を活かして安心な暮らし

田んぼダム

⇒スーパー畦畔（内堤防要素）

水コントロール

（遠隔管理・ソーシャルビジネス）

木製排水柵などの木材利用

（〇〇億円の需要創出）

つから米（生産者⇔消費者 感謝の念）

未来へつなげたい こと

(3) 水循環を活(生)かす (田んぼの水質浄化装置構想)

土・農地の浄化機能で水循環システム構築

暗渠排水技術を活かして循環水を生み出す
(遠隔管理・水質監視)

遊休農地を食糧生産⇒水環境ビジネスへ
陸上養殖などへの活用

⇒田んぼの水質浄化装置と考え
美しい水を生み出し、貴重な水を循環
潤う水で生態系と共存

農村の未来図 農村の10次産業化の展開について (案)

情報活用による農の10次産業化

「楽」をキーワードに
農業農村を魅力あるものに

1次 農を楽する

農作業の電化・自動化
水管理の遠隔化
田んぼ 水循環・浄化・ダム
ドローン・GPS活用(管理・河海)

2次 食を楽しむ

特産品開発・食品加工
オンライン販売・配達サービス
出荷作業・管理 効率化

3次 農村を楽しむ

農業体験・生きもの体験
半農半X・ワーケーション
ヒーリング・健康増進
農村での出会い・つながり・交流

4次 文化を楽しむ

伝統行事祭事のオンライン発信
伝統食の継承
歴史文化のアーカイブ化

10次産業化

農 + 食 + 農村 + 文化
1次 2次 3次 4次

未来図への思い

新技術(情報技術)を生かして

ひと・もの・ときの繋がりを
大切にする時代になってほしい

心豊かな社会 安心できる社会



農村の10次産業化について（提案）

1次	農業（生産）	農家
2次	加工（料理）	料理人
3次	サービス（体験）	企業
4次	文化（歴史・理念）	地域暮らすみんな

1次 + 2次 + 3次 + 4次（時代） = 10次

農村地域への情報通信の普及に際し
農村の魅力の情報発信を行いながら、
生産者と消費者の新たなつながり
を創造し、地域の文化を次世代につないでいく

農村から10のいいことが始まる・生まれる

- ・ 生きる源『食』から、心も体も健康に長寿な暮らし
- ・ 『食』を支える『農』と『農村』の多様な役割を理念でつなげる
- ・ 1次（農業）+ 2次（加工）+ 3次（体験）+ 4次（文化）= 10次（10のつながり）

「食」の大切な役割

暮らし

食を通じた
生活習慣

からだ

発育や
健康維持

こころ

食事で
情緒を育む

「農」の大切な役割

しごと

農に関する
生業

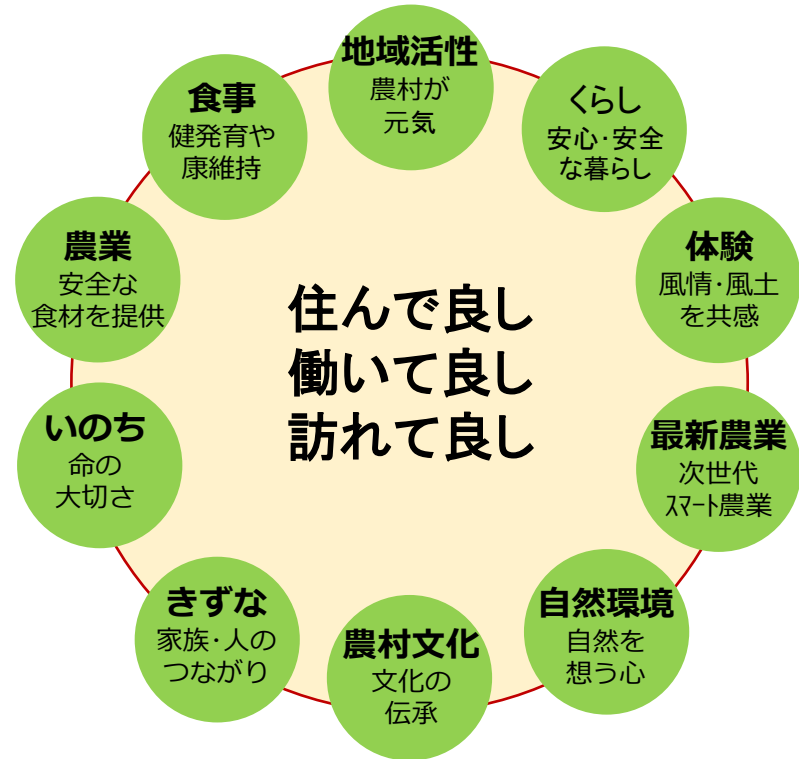
ちいき

農から広がる
地域づくり

いやし

農村探訪で
憩う

理念でつなげる（10のキーワード）



64-5 農山漁村振興交付金のうち 情報通信環境整備対策

【令和3年度予算概算決定額 9,805 (9,805) 百万円の内数】

<対策のポイント>

人口減少、高齢化が進行する農村地域において、農業水利施設、農業集落排水施設等の農業農村インフラの管理の省力化・高度化を図るとともに、地域活性化やスマート農業の実装を促進するため、情報通信環境の整備を支援します。

<事業目標>

農業農村インフラの管理省力化等を図る情報通信環境の整備に取り組み、事業目標を達成した地区の創出（50地区〔令和7年度まで〕）

<事業の内容>

1. 計画策定

情報通信環境に係る調査、計画策定を支援します。

2. 情報通信環境整備

① 農業農村インフラの管理の省力化・高度化に必要な光ファイバ、無線基地局等の情報通信施設の整備を支援します。

② ①の情報通信施設を地域活性化やスマート農業に有効利用するための附帯設備の整備を支援します。

<事業の流れ>



<事業イメージ>

農業農村インフラの管理の省力化・高度化



地域活性化・スマート農業

地域活性化
活性化施設の
公衆無線LAN



スマート農業



※ 無線基地局は地域の実状を踏まえて適切な通信規格（LPWA、BWA、Wi-Fi等）を選定

【お問い合わせ先】 農村振興局地域整備課 (03-6744-2209)

ご清聴ありがとうございました



奈良県 下浦隆裕

田んぼの活用・木材利用の事例

【参考】

○水の器としての田んぼ



○木材利用（柵、畦畔補強）



* 未来の農村の暮らしの中で「暮らし」を切り口にイメージを具体的に整理してみました。

食・農・林から支える農山村の豊かな暮らし

○健康的な生活から ⇒ 健康長寿に繋げる長生きの暮らし

塩分などの栄養管理をされた、配食サービスや食材配達サービスによる、規則正しく適量な食事の摂取による生活習慣の維持 ⇒ 健康長寿に暮らす

○安心安全な生活から ⇒ 安心な農山村の暮らし

配食や配達をキッカケに、1人暮らし等の高齢者等の見守り体制を構築して、安心・安全な生活を維持 ⇒ 安心に暮らす

○移動販売の活用から ⇒ 便利な農山村の暮らし

配食や配達他に、数回に1度程度移動販売車を巡回させることにより、買い物難民を解消 ⇒ 買い物出来る楽しみが生まれる暮らし

○地域コミュニティーから ⇒ 声かけ支え合う暮らし

配食や食材配達サービスや食材生産に地域の元気な方が働きお互いの声かけ運動やコミュニティービジネスに繋げる ⇒ 支え合いの暮らし

* 新聞や郵便配達イメージで

○地域の旬の食材から ⇒ 地産地消による豊かな暮らし

地域で栽培された旬の野菜等を活用する。買い取り、地域内での経済循環活動、高齢者等のやりがい活動・元気活動に繋げる ⇒ やりがいを生む農作物栽培の暮らし

○オンラインの活用から ⇒ 便利な農山村の暮らし

簡易なオンラインシステムを導入して、食材注文のみならず、注文を通じた簡易な健康管理（体温、血圧、体調程度）も実施 ⇒ 便利で安心できる暮らし

○林産材の活用から ⇒ 木のある農山村の暮らし

箸や配食ケース、農業資材などの脱プラスチックにより、SDGs 的に、極力、木材や竹材を活用を考える ⇒ 地域循環で創意工夫した暮らし

○土・水・木などの地域資源の活用から ⇒ 心豊になる農山村の暮らし

土・水・農・食・木・自然に触れて学ぶことにより、敬意や感謝・やりがい・誇りを感じる人々の繋がり（コミュニティー）を築き、心豊かな暮らしを実現 ⇒ 敬意や感謝の念が生む心豊かな繋がりのある暮らし

（目指すところのイメージを再整理）

- ・ 配食、配達、移動販売、オンライン注文等のシステムを構築
- ・ 食材は、できる限り地産地消で地域に還元（働く場の提供）
- ・ 食品、食材をブランド化して地域での定着
- ・ 食を通じて、健康管理（栄養）、暮らし管理（見守り）、元気管理（やりがい、コミュニティー）を実感出来る農山村の暮らしを実現
- ・ 箸や弁当箱などに木材や竹材の活用、SDGs の取り組み推進
- ・ 土・水・農・食・木・自然に触れる機会や学びの場

「ノウカル」座談会（農村情報ネットワーク）について

○コンセプト

あなたの関心事は何ですか？「食べる」「健康」「安心な暮らし」……。

人々は、食べなくては生きていけませんし、健康でなくては長生きできません。

生きるためには、食べること、健康でいることは非常に大切なことです。

食べるには、食材を確保して、加工して、おいしく食べることが重要です。

そしてその食材は、農畜水産であり、おいしく食べるには、料理人などの加工が必要です。

農村では、各地域で脈々と引き継がれてきた、農業や食文化、農村行事があります。

私たち日本人は、恵まれた四季の環境の中で米を作ることを学び、大地を活かし、水を活かし、自然や気象環境と共存し、皆で助け合い暮らす農耕文化・稲作文化を築き上げてきました。

全国各地で行われる、正月、初詣、節分、節句、夏祭り、秋祭りなどの年中行事や七五三などの人生儀礼は、五穀豊穰や健康長寿、地域・家内安全などの願いを込めた、地域に関わらず誰もが経験している日本の文化です。

今を生きる私たちにとって、先人から知恵を学び、未来に継いでいくことも大切です。

農業は、「アグリカルチャー」と呼びます。「アグリ」は「土地」を、「カルチャー」は「耕す」を意味します。また、「カルチャー」は「文化・教養」という意味もあります。ここに共通していることは、「土地」と「人」です。

「アグリカルチャー」は、「土地を耕し人々が作り上げていくこと」つまり、人々の繋がりや関わりがあって、農業が文化を形成する価値のあること、大切なことかと考えます。

そこで、みんなの共通の話題である「食」を切り口に、農畜水産業のこと、料理人のこと、農業や農村の楽しみ方のこと、農村文化や食文化の奥深さのことなどを改めて学べる場、仲間づくりの場を作りたいと思います。

農業や農村のことを文化的にも考える、「農業」と「文化（カルチャー）」です。

この勉強の場を、略して「ノウカル」と呼びたいと考えます。

また、

1次産業の農畜水の生産、2次産業の食料加工や料理、3次産業の農業体験などのサービス、そして4次元的な時代の流れ、文化的流れを4次産業と呼び、総合して、

「農業農村の10次産業化」を提唱していきたいと思ひます。

そこで、

「ノウカル」の活動は、自分自身のできる範囲で、楽しく、気楽に以下の活動を行います。

【「ノウカル」（農村情報ネットワーク）の活動理念】

- (1) 仲間、繋がりをつくる……共感、連携できる仲間づくり。緩いネットワークづくり
- (2) ほんまもんを知る……生産者、料理人、暮らしの実践者から現状を学ぶ
- (3) 地域を応援する……地域の農業や農村の暮らしを自分ができることで応援する
- (4) 未来に伝える……未来の後継者に新たな技術も取り入れながら伝える

これらの活動により、共通の目標として、「地産地消による地域自給率のアップ」を掲げたいと思ひます。